いじめられてるから殺し屋になった

ジョブス・マンソン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

いじめられてるから殺し屋になった

【Nコード】

N1967Z

【作者名】

ジョブス・マンソン

【あらすじ】

やあ、いじめられっ子のみんな。

僕はジョブス・マンソン。

君らと同じいじめられっ子だ。

だが、君たちとは決定的に違うことがある。

それは行動力さ。

僕はあのイカした奴らを皆殺しにするため、殺し屋になることを決意した。

だけど現実はずらいね。

訓練って名前の地獄は、ひよろひよろなガキにすぎない僕にとって、
いじめられることよりも辛かった。
これは、とあるいじめられっ子の復讐日記。

殺し屋になるなんて、とっても簡単だ

今時、自分の生活に疑問を持ったバカが殺し屋になるなんて日常茶飯事だ。

隣に住んでるハリーなんか、友達の首にナイフを突き刺して、色んな物をえぐり出していたらしい。

そんな彼はポリス共に捕まりもせず、今も普通に学校に登校して、平然と他の友達と談笑している。気の違ったような狂者とは思えないほどの常人っぷりだ。

つまるところ、僕も殺し屋になろうと思っている。
なぜかって？

そんなもん、決まっているだろ？

僕はくだらない日常に飽きてきたバカだからさ。

「出てこいよ、ジョブス」

同級生の、嫌みな笑い声が、僕の隠れている個室に聞こえた。その声に毎日のようにストレスを感じていて、もし僕が臆病じゃなかったら今すぐ気違いハリーのようにヤツの首にナイフを突き立てただろう。

僕は臆病だ。

「水かけてやろうぜ」

幼稚なことばかり考える奴らに、苦笑した。

もちろん、そんな風に気取ってみせても僕にはスーパーマンみたいな力はないから、ただのええかつこしいにしかならない。

バカ共は容赦なく水を降り注いだ。

そして聞こえるバカたちの耳障りな笑い声。

これが僕の日常だ。

いや、こんなの序の口というところか。

バカな奴らの中には、ラグビー部に所属する奴なんかもいたりして、その無駄に鍛えられた、岩のような肩で吹き飛ばされて一週間に一回は青いアザが浮かんでくる。

物語なんかにもあるが、現実のラグビー部もヤな奴ばかりだ。

だから、僕は母親に言ったんだ。

今までしたこともないような真面目な顔でね。

「殺したい奴がいるんだけど」

サイッコウにカツコイいだろ？

人生でも三本の指に入ると思ったね。

だが、そんな僕の決意も虚しく、母親は困ったような顔をして、こう叱るんだ。

「そんなこと言っちゃダメでしょ？」

ってな。

こうなったら、僕自身が動くしかないだろ？

ネットとかで必死になって探したね。そりゃあもう、血眼とも言えるほど。

青くなったアザを冷やししながら、それでもマウスを握ったさ。

そして、とうとう見つけたんだ。

「殺し屋、雇います？」

面白い見出しだな、と僕はすぐさまカーソルを合わせた。
途端に大音量の軍歌が流れだしてね、イスから転げ落ちたさ。
扉の向こうから父親の怒鳴り声をするし、とりあえず音量をゼロ
にして、画面を見つめた。

シンプルだった。いや、それはもうシンプル。

名前と年齢、それだけを記入してください。

それだけが真っ白な画面に書かれているんだ。

あの軍歌はなんなんだ、と怒りが湧き上がってくるのも無視して、
とにかく文字を打てる場所を探した。

啞然としたね、びっくりしたね。

その書き込むところを画面の隅から隅まで探しても見つからない
んだ。

ならどこなんだ？

「名前と年齢、それだけを記入してください。1」

は？

いや、まさかそこに書き込むのか、と大笑い。

また父親の怒鳴り声があるが、そんなの腹を抱えるほど笑う僕の
耳には届きはしなかったさ。

灯台下暗しという日本語を、ようやくここで理解した。そりゃ気
づかないわけだ。

「ジョブス・マンソン。15歳」

律儀に句読点なんか付けちゃってるんだぜ、僕。

まあ見ての通り、僕は15歳だ。

中学生？ 違う違う。あんな幼稚な奴らと一緒にしないでくれ。

これでも偏差値は70の高校に通っているんだ。いわゆる、エリートって奴さ。

それでもバカで幼稚な糞野郎は必ずいる。

「おっ」

いつから出ていたのか分からないエンターボタンをクリックした。すぐに画面は移り変わり、僕の住む地域の地図が表示された。なんで知ってるんだ？ もちろん僕も疑問に思ったさ。

いや、こんな治安の悪い世の中なんだし、殺し屋とかいう組織なんだから当たり前なのかも知れない。

そう考えたのは事後だ。

今の僕は、何も考えていない豚のような思考回路でその地図通りの場所に足を運んだんだ。

さあ着いた。

どこか教えてほしいか？

公園さ。公衆トイレとかいう絶好のレ スポットで有名な、いわば穴場さ。ふふ、上手いだろ？ 穴場ってさ。

僕をいじめているバカな奴らも、ここでレ プしていた体験を自慢げに話していた。

「来たはいいが」

誰もいない。

墓地のようにシーンとした公園は、僕みたいな不幸な人間を手招きしているようにも感じたが気のせいだったよ。人いたし。

「君がジヨブス君か」

スキンヘッドが似合う、掘りの深い顔のおじさんが歩み寄ってきた。

ここで、危険を察した僕の思考回路は豚からスーパーコンピューターへと変貌した。

ここは絶好のレプスポットであり、最高のハッテン場だ。簡単に言えば、ホモが集まるところだ。

なら、このおじさんはなんだ？

もしかしたら本当に殺し屋かも知れないし、僕の尻穴を掘ろうとしているホモ野郎かもしれない。

さて、スーパーコンピューター並みの頭脳を無駄に使ったところで、おじさんと握手をした。

そのゴツい手はとても冷たい。ずっと僕を待っていたのが肌で感じられた。

「殺し屋になりたいんだってね？」

おじさんは、その掘りの深い顔に似合わず、愛嬌のある笑顔を見た。

黙って頷く。

心の中じゃあすでに殺し屋の気分さ。目をキリッと細めて、いかにもな雰囲気を漂わせる。

僕は高校生のひよろひよろはガキに全く似合わない表情をして、おじさんにだけ聞こえるよう、小声で言った。

「あんだ、本当に殺し屋か？ 殺気を感じないぜ？」

正直、これをいじめっ子連中に見られたら、自殺ものだろう。

そんな僕のくだらない茶番に、おじさんはウィンクをした。

「殺気なんか出してちゃあプロ失格だからね」

その科白と同時に、おじさんは僕の背後へと周り、僕の細っこい喉にナイフの切っ先を当てていた。

さっきまで手ぶらだったはずなのに、まるでマジシャンみたいだと緊張感もない感想を抱いた。

そんな命に関わる状況でも、僕は強く言ったね。

「プロ、か。無防備のガキに刃を当てた時点で、あんたはプロ失格だよ」

「ふっ。それもそうか」

途端に背筋から悪寒と、冷や汗がぶわっと吹き出した。

それはもう死に直面したと言っても過言じゃないね。

それは、紛れもなく殺気だったからさ。

「あ、わ……あ……」

僕は無様にへたり込んで、恐怖のあまり失禁していた。

買ってもらったばかりのジーンズが濡れていくのを、涙の出そうな顔で見つめるぐらいしか出来なかったね。

おじさんはまたいつの間にか僕の前に立っていて、手を差し伸べてくれた。

「立てるか、ジョブス君」

黙って頷くしかなかった。

そこにはもう殺気なんか微塵も無かったのに、それでも僕は恐怖

していた。

その殺気は、いじめっ子にいじめられることなんかより、もっと恐かったからさ。上辺だけ強がっていた程度の僕の精神なんか、おじさんの殺気の前じゃあトランプで作ったタワーのように脆い。そして、一押しすれば簡単に崩れてしまう。

連れられるままに連れられ、男子便所へと入っていく。

そのまま個室へと誘導され、扉を閉められた。

途端に身震いがした。

今度は殺気じゃない。

この状況じゃあ、どうぞ掘ってくださいと言ってるようなもんだ。だけど、僕の尻穴は処女のままだった。

便所の、何も無い壁が、奥にパタリと倒れたんだ。そして、そこには地下へと続く階段が伸びていた。

「この先だよ」

促され、ビクビクと震える。

濡れた股間がすごく寒いが、それでも我慢したさ。あのバカ共を殺せるなら、ってね。

イカしてるだろ？

行き止まりにあつた扉に入ると、また失禁をしそうになった。

なぜか？ それはさつきと全く同じ理由さ。

そこには、殺気が渦巻いていたんだ。

何人もの人間が殺気を放っている。個人個人は微々たる物だろうけど、それがいくつにも重なり、合わさっていた。

怯える僕に、その人間たちの視線が集まった。

「おいおい、ガキかよ」

「震えてやがるぜ」

「股間濡れてっけど、まさかしょんべん漏らしちまってんのか？」

爆笑が起こった。

それに腹が立ち、僕は叫んだのさ。勇敢にもね。無謀？ 殺すぞ。

「笑っんじゃねえ！！」

一瞬で静まり返るが、また爆笑が沸き起こる。

その時の僕は身の程を知った方が良かった。専門学校に三年通わせて、みっちり叩き込むべきだったね。

浴びせられる罵詈雑言の笑い声。

「行こうか」

ライオンの群れに挑む小鹿を哀れに思ったのか知らないが、おじさんが優しく背中を押してくれた。

ここからが本当の地獄だった。

たかがいじめっ子なんていう頭のおかしい連中のためには、あまりにも過酷だった。

殺し屋になるなんて、とっても簡単だ（後書き）

「殺し屋っていうのは、こんな現実離れた奴らばかりなのかい？」

「いや、殺気だけで失禁させられるような奴、まずいねえよ」

「そりゃそつだ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1967z/>

いじめられてるから殺し屋になった

2011年12月7日02時02分発行